
殺し屋パンダ

nab42

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺し屋パンダ

【Nコード】

N7233Q

【作者名】

nab42

【あらすじ】

十一月二十日の夜、笹島は胸を刺されて殺された。容疑者の一人として疑われている僕は、馴染みのカフェバーでパンダ姿の男と出会った。

殺し屋パンダシリーズ1作目

僕と事件、そしてパンダ

【1】

僕は疲れていた。昨日は色々なことを聞かれたし、そのことで夜は寝ることができなかった。そして、寝ることができたと思った途端、起きなければいけない時間になった。そのつけが今になってやってきている。眠くて授業なんて聞いていられない。その授業が一番大切になっていたドイツ語の授業だったことも僕の気持ちを暗くした。

僕は授業が終わると、すぐさま大学を出た。そして、十分ほど歩き、駅前に出て、その前にある大きな通りを進み、四本先の横道に入った。

それから二つ目のビルの地下一階に潜った。そこには僕がよく通うカフェバーがあった。名前は『モールヒル』といった。

僕は店名が書かれた真っ黒の頑丈そうなドアを開けた。店内は仄暗かった。わざと数を少なくしたシリカ電球が、壁と天井を照らし、壁に反射した光が店内を照らしていた。

「いらっしやい」とマスターが言った。いつもと変わらない暖かな声だった。

「コーヒート、それにちよつとブランデーか何か入れてくれませんか」と僕は言つて、カウンターに座り、メッセンジャーバッグを床に置いて、椅子の背もたれにマフラーをかけた。客は僕一人だった。「はいよ」とマスターは言つて、フィルターペーパーを慣れた手つきで折った。

僕は、入口近くにあつた新聞置きに向かい、今日の朝刊を取った。席に戻ると、何かいいことがあつたのかマスターは鼻歌を歌っていた。なんの曲かは分からなかった。

僕は新聞の一面を見た。大きな見だしで、政治家の脱税疑惑のこ

とが書かれていた。そして、青森で起きた殺人事件と、隣の市で起きた殺人事件のことが同じくらいの大きさで書かれていた。僕は社会面を開き、隣の市で起きた殺人事件の記事を読み始めた。事件は昨日、十一月二十日に起きた。

十一月二十日の夜九時、S県M市マンションの一室で、血を流して死んでいる笹島忠信さんを友人が発見、S署に通報した。同署は、胸に数カ所、刃物のようなものによる刺し傷があったことから、殺人事件の可能性が高いと見て捜査を始めた。同署によると笹島さんは、ベッドに仰向けに倒れており、室内に荒らされた形跡や物色の様子はなかったという。現場は県道から少し離れた住宅街の一角で、人通りは少ない。

さらに付け加えるならこうだ。彼の年齢は僕と同じ二十二歳で、私立S大学の経済学部に通う、四年生だった。彼は優秀な生徒だった。だが、素行はそこまでよくなく、女遊びは結構やっていた。僕は彼が女の子をそういうふうに見ているのを知っていた。彼は、それに対して何も罪悪感を持っていなかった。たしかに、あれだけ頭が良くて、顔も悪くなかったら女は寄ってきただろう。

僕はそれに対して、どうかと思っていた。その行為は女の子にもてない僕にとって憎い行為だった。だが、同時に僕は彼を尊敬していた。羨望の眼差しを向けていたと言ってもいい。彼は英語とドイツ語を話せた。僕にとってそのスキルは喉から手が出るほど欲しいものだった。僕は彼にドイツ語を教わったこともある。彼ならドイツ語の先生にもなれただろう。教え方もうまかった。

「はい。おまたせ」とオーナーは僕の前にコーヒーを置いてくれた。コーヒーの香りが僕の周りの空気を濃くした。

「もう、三年になるんだね」とオーナーは言って、薄くなりはじめた頭をそつと撫でた。

オーナーは僕の友達の死を言っているのだ。

「そうですね。早いものです」、と僕はコーヒーを飲んだ。体が温まるのを感じた。

「彼女は……、いや、なんでもないね」とオーナーは言ってもう一杯コーヒーを作り始めた。

まだ四時前だった。

コーヒーを飲み終えようとしているところに、店のドアが開く音がした。客が入ってきたようだった。

「いらっしやいませ」とオーナーは言った。

客は僕の席から少し離れた席へと座った。

「バーボンをストレートで」と低い声で男は言った。いい声だなと僕は思った。まるでコーヒーのような渋くて酸味のある声だった。

「ジム・ビームでよろしいですか？」

「ええ」と男は言った。

僕はその声の主が気になって、男の方を見た。そして驚いた。

男の姿はパンダだった。

僕と刑事、そしてパンダ

【2】

男のパンダのような姿は僕を驚かせた。だが、オーナーは驚いていないようだった。

「何か？」とパンダが僕の方を向いて言った。どうやら僕はじろじろと男のことを見すぎたらしい。

「いえ」と僕は言って新聞を読みなおすふりをした。

だが、僕はそれからちらちらと男の方を見た。男はパンダの姿をしていた。だが、動物のパンダというより、ぬいぐるみのようなパンダだった。着ぐるみのパンダだとも言える。彼はその姿にスーツを着ており、それからこげ茶色のコートを羽織っていた。頭には、コートと同じ色をした丸い大きなソフトハットをかぶっていた。黒いリボンがついているその帽子の鏝からは、黒いパンダ耳が二つぴよこんと出ていた。男の風貌は可愛いと言えなくもないのかもしれない。だが、彼は喋り、真っ黒いふさふさの手でロックグラスを掴み、バーボンを飲んでいゐる。可愛い以前の問題で、あまりにも奇妙だった。そのことにオーナーは気付いているのか、気付いていないふりをしているのか、僕には分からなかった。ただ、オーナーは動じていないようだった。他愛のない話をパンダ姿の男としていた。

僕は、腕時計を見た。五時十分になったところだった。そろそろお客も増えてくるころだ。そう思った時に、真っ黒のドアが開いて、スーツを着た三人組が入ってきた。仕事帰りなのかもしれない。

「オーナー」と僕は言って財布を出した。

「今日はいいいよ」とオーナーは言った。

「そう？」

「ああ。また来なよ」

「ありがとう」。僕はそう言って店を出ようとドアを開けた。

ドアを閉める時、パンダ姿の男と目が合った。といっても、そこに目があるのかどうか分からなかった。男のコートの背中中は、何故かふっくらとしていた。

それから僕は本屋に行き、ファッション雑誌を数冊流し読みして、ヘルマン・ヘッセの文庫本を一冊買った。それから、駅前のハンバーガーショップへ行き、文庫本を読みながら夕飯を済ませた。眠気はいつの間にか消えていた。

だが、自分の部屋へ戻ると、一気に眠気がぶり返してきた。僕は、バッグを部屋の入り口近くに置き、上着を脱ぐとすぐにベッドに倒れこんだ。そして、目を閉じた。

ピンポーンと、チャイムの音が鳴った。僕は目を開けて、うんざりした気持ちで玄関へ向かった。

玄関のドアを開けると、二人の男が立っていた。二人とも僕の知っている顔だった。一人は今林、もう一人は佐伯と言った。今林は四十代の、横にも縦にも大きな、カエルのような顔をした男で、佐伯はがっしりとした体格のスポーツ青年といった感じの二十代の男だった。二人は刑事だ。

「少し、お話いいでしょうか？」と今林は言った。

「何か？」と僕は言って「昨日、全部話したと思うんですが？」と付け加えた。

「ええ、ですが、ちょっと残念なところがあった」

「何ですか？」

「ここじゃ何なので、中に入らせてもらえないでしょうか？」と今林は低姿勢で言った。

「どうぞ」と僕は言って、玄関のドアを大きく開いた。

刑事たちは玄関に入って、ドアを閉めた。僕は玄関の明かりをつけた。

「ちょっと残念なことがありましたね」と今林は再度言った。

「何ですか？」と僕も再び言った。

「昨日の夜、七時半くらいなのですが……」

「昨日も言ったように、僕は近くのスーパーで買い物をしていました」

「ええ、もちろん分かっています。ですが、あのスーパーには防犯カメラがなかったんです」

「防犯カメラが？」と僕は言った。

「ええ、珍しいことだとは思いますが。このご時世、万引きが防止のために設置していると思っていたのですが」

「つまり、僕がそこにいたかどうか分からないから来たのですか？」

「ええ、そういうことになります」と今林は申し訳なさそうに言った。「何か他に、証拠になるものはないでしょうか。誰かに会ったとか」

ふん……と僕は鼻息をして考えた。どうにかして僕のアリバイを証明しないと警察は僕をずっと疑い続けるだろうな。まあ、笹島とは親しかったわけだし、何度か彼の家にも行ったことがある。疑われるのは仕方がないことかもしれない。

「ああ」と僕は言った。「レシートがありますよ」

「それはいいですね。ぜひ見せていただきませんか？」と今林は言っ
て頷いた。隣にいた佐伯も顔を緩め、頷いた。

「ちよっと待っててください」と言っ
て僕は僕は部屋に戻った。テーブルの上にあったダイレクトメールやチラシに混ざっていたレシートを僕は手に取った。

「これです」と僕はレシートを手渡した。

今林は白い手袋をすると、それを受け取った。

「なるほど。昨日の午後七時二十七分に買い物を買っていますね」

佐伯は横からそれを覗き込んだ。

「買ったものは、牛肉と卵、あと、玉ねぎですか」

「ええ」

「よく料理はされるんですか？」

「ええ、たまに」

「昨日は何を作られたんです？」

「牛丼です。簡単なんで、よく作るんです」

「なるほど……」

「お前、料理得意か？」と今林は佐伯に言った。

「いやあ、僕はほとんどしませんね。コンビニ弁当とか外食で済ませてます」と佐伯は苦笑いした。

「もし材料が残っているなら見せてもらいませんか？」

「ええ、分かりました」、僕は、そう言って彼らを台所に案内した。と言っても玄関に入るとすぐ右側が台所だ。玄関から台所は見えて

いる。

「あと、このレシート、お預かりしてもいいでしょうか？」

「ええ、いいですよ」と僕は言った。

今林はどこからか小さいビニール袋を出し、その中にレシートを入れた。

彼らは靴を脱ぐと部屋に上がった。僕は後ずさりして部屋に戻った。そして、部屋と台所の間にある隙間の冷蔵庫を開けて、彼らに中を見せた。

「これが昨日買った玉ねぎですか」と、野菜室を開けながら今林は言った。

「ええ、そうです」

「なるほど」と彼は言った。「玉ねぎを入れた袋はないのですか？」
「すみません。捨ててしまいました。昨日がちょうどごみ捨て日だったので」

「そうですか。こっちの卵のパックもそうですか？」

「そうです」

「きれいに整頓されてますね」と佐伯が言った。

「ええ」

「卵も一つ一つケースにいれてあって、いやあ、僕の学生時代とはえらい違いだ」

「お前もちゃんとしたらどうだ。どうせ部屋も汚いんだろう」と今林は佐伯に言った。

「面目ない」と佐伯は返した。

「そういえば、牛肉は全部使われたんですか？」と佐伯は聞いてきた。

当然だろうな、と僕は思った。

僕は冷凍室を開けて、「使い切れなかった分は冷凍したんです」と言った。

「なるほど。ありがとうございました」と一礼して、今林は言った。佐伯はラップをした凍った牛肉一度手に取り、そして戻した。

彼らは黒の革靴を履くと、もう一礼して、玄関ドアを開けた。やつと帰ってくれるようだ。

二人が玄関の外に出た時、「あ」と佐伯は何かを思い出したように言った。

「何か？」と僕はちよつと驚きながら聞いた。

「いえ、最後に聞いておこうと思って。笹島さんの女性関係のことなんですが、どう思っていました？」

「僕はどうにかした方がいいと思っていました。罪悪感もなかったようだし……」

「なるほど。では、笹島さんが女性と一緒にいる姿を見たことがありますか？」

そういえば、あまり見たことないなと僕は思った。もちろん彼もてるし、学校内でも、女の子と話しているのを見たことがあるが、彼女たちはただの友達のようなだった。いや、まあ、それも僕の憶測なのだが。

「あるといえば、あるんですが」

「それはどこで？」

「大学の構内です」

「相手の女性とは親密な様子でしたか？」

「いえ、あまりそういった感じではなかった気がします。ただの友達のような……。憶測ですけど」

「分かりました。ありがとうございます」と佐伯は言ってドアを閉

めた。

僕はベッドに戻って、横になった。だが眠気はまたどこかへ行っ
てしまっていた。僕は天井を見ながら、佐伯の最後の質問の意図を
考えた。なぜ、あんな質問をしたんだろう。

その時、ピンポンとまたチャイムがなった。

今度は誰だろうか。嫌な日だ。だが、こんな日がしばらく続きそ
うだなと僕は思った。

僕は「はい」と言いながら玄関を開けた。

玄関の前には、あのパンダが立っていた。

僕とパンダ、そして真実

【3】

突然玄関先に現れたパンダは「すいません。西さんですよね？」と言った。

僕が黙っていると、男は「笹島さんについて聞かせてくれませんか？」と言った。

「あなた誰ですか？ パンダの格好なんかして？」

「すみません。ちょっとわけあってこの格好なんです。実は、笹島さんの交友関係を調べているもので、よければお話を聞かせてもらえませんか？」

「笹島は昨日死にましたよ」

「知っています。でも、私が知りたいのは笹島さんの交友関係なんです」

パンダ男の目には眼というものがなかった。そこには垂れ目の黒い楕円しかなかった。きつと小さな穴でも開いていて、そこから外を見ているんだろう。視野が狭くて大変だろうに、なんだってこんな恰好をしているのだろう。

「僕は何も知りませんよ。そんなに親しくなかったし」

「いや、そんなはずはありません、西さん」とパンダ男ははっきりとした口調で言った。

「あなたはサヤカさんのことを知っていますね？」

サヤカは三年前に死んだ、僕の女友達だった。

「いいですよ。入ってください。その格好じゃ目立ちます。変な噂は嫌ですからね」と言って僕は男を部屋に入れた。

「ありがとうございます」と男は相変わらず低い、いい声で言った。

僕はベッドに腰掛けた。パンダ男は低いテーブル越しに、向かい側に座った。正座だった。

「コートを脱いでいいですか？」と男は言った。

「ええ、どうぞ」と言ったが、それは長居を意味するような気がして嫌だった。だが、だめですとは言えなかった。

男はコートを脱いだ。パンダの着ぐるみの上はスーツだった。僕が『モールヒル』で見たものと同じだ。首には黒くて細いタイを結んでいた。そして彼はコートと同じこげ茶色をした、黒いパンダ耳がぴょんと出たている帽子も脱いだ。だが、そのぴょんと可愛らしく出ている耳は本物の耳ではなかった。帽子の中から新しく、二つの小さくて丸い耳が出てきた。僕はなんだか笑いそうになった。まるでカツラを取ったおじさんみたいだった。

「で、何を聞きたいんですか？ できれば短くしてもらいたいんです」

「ええ、できるだけ短くしますよ」と男は言った。

「だが、その前に謝りたい。私は西さんに何も聞く必要がないんです」

僕はパンダの顔を見た。何を言っているんだろう。

「どちらかと言うと、全てをあなたに伝えなければならぬのです」

「つまり、何がしたいのですか？」と僕は言った。

「そうですね。何から話しましょうか」と男は真っ黒い右手で頭を掻いた。

僕は黙っていた。だが、僕は聞いた。

「あなた何者です？ 警察でもないでしょうし、探偵か何かですか？」

「ああ、私ですか？ まあ、どちらかというと探偵ですかね」と彼は煮え切らない答えを言った。

「身分を証明できるものはありますか？」と僕は眉間に力を入れて言った。

「ないんです。困ったことに。私も欲しいんですけどね」

僕は黙った。このパンダ男は何がしたいのだろうか。

「では、まず言います。笹島さんを殺したのはあなたです」

「何を言い出すんだ！」と僕は怒鳴った。思いもよらないことを男が言ったので、つい声が大きくなってしまった。

「おかしいことですか？ 私はそうは思いません。笹島さんがあなたに殺されたから、私はここにいるのです」

「意味が分からない。帰ってくれ」

「もちろん、いずれ帰ります。ここは乱雑すぎる。私も神経質なほうではないんですがね。テーブルの上に、いらないものを置くのは嫌いなんです。たとえば、このチラシやダイレクトメール」と言つて男は宅配ピザのチラシを手を取った。

「あなたは、通常、神経質ではないようだ」

「それが何か？ 神経質ではなかったら笹島を殺すというんですか？」

「笹島さんはたくさんの人に恨まれていたようですね。とくに女性に。まあ、遊び人だったようですから、それは仕方ないでしょう。

彼は彼なりに気を使っていたみたいですが……。さて、なぜ神経質ではない、つまり、なぜ綺麗好きではないあなたは冷蔵庫をあんなに整理しているんです？」

「冷蔵庫？ ……見たんですか？」

「いいえ。見ていません。ただ知っているだけです。あなたは冷蔵庫を整理した。なぜならパックに貼ってあるバーコードを捨てるためです。バーコードが見つかってしまえば、その商品を近くのスーパーで買っていないことがばれてしまいますからね」

僕は黙って、パンダ男を見ていた。こいつは何者なのだろうか。「でも、無駄なことです。警察は明日にでもあなたを逮捕するでしょう。佐伯という刑事は気付いていますよ。彼は料理をするのでしようね。あなたが今冷凍室に入れている牛肉。あれは脂身が少なすぎます。あなたが昨日作ったという牛丼には合わないでしょうね」

僕は黙っていた。男のシャツの胸ポケットにはタバコの箱が入っ

ていた。

「それにあなたが、警察に渡したレシート。あれも大切な証拠になりました。まず、あのレシートには三人分の指紋がついています。あなたと、レジを打ってくれた店員の指紋。そして、他の第三者の指紋です。もちろん、あなたも知っていますね。あのレシートは昨日の夜、笹島さんを殺した後、あなたがスーパーから取ってきたものの一つです。あのスーパーにはレシートを捨てる箱が、商品を買う物袋に入れる台のところにありますね。あそこからあなたは取ったのです。そして、あなたはあのスーパーに防犯カメラがないことも知っていた。あそこは小さなスーパーマーケットです。レジも三台しかない。天井を見回しても、カメラのようなものもない。実際万引きもなかったんです。あなたもそれを知っていましたね」

「もし、そうだとしてもだ」と僕は男を見下ろして言った。「それを確かめる術がないだろう。僕がレシートを取ったとして、それがなぜ分かる」

「それは三人目の指紋です」

「なぜ？ 俺は貰ったレシートをスーパーから出る時に落したんだ。それを取ってくれた親切なおばさんがいたんだよ」

「それは嘘です。なぜなら三人目の指紋も店員さんのものだからです」と男は上目づかいで言った。妙な威圧感があった。

「あなたは運が悪かったのです。牛肉、卵、玉ねぎを買ったのは、同じスーパーの店員さんです。レジを打っていた人に聞いても分かるでしょう。午後七時二十七分ごろ、牛肉、卵、玉ねぎを買った人を知りませんか？ とね」

「ふふ」と僕は笑った。なぜか笑いがこみあげてきた。サヤカとジェットコースターに乗った時もそうだった。怖いのに笑ってしまうのだ。

「あなたは笹島さんを殺すために、彼の部屋に行った。そして殺した。あの日はサヤカさんの」と男が言ったところで「もういい」と僕は言った。「そんなことは知っている」。そんなこと、全部知っ

ている。

僕とサヤカは高校からの友達だった。僕は高校時代から密かに彼女のことが好きだった。誰にでも親切で、笑顔をふりまくやつだった。でも、僕は告白できなかった。サヤカから離れるのが怖かった。今、思うと、もしサヤカが僕をふつたとしても、僕は彼女のそばを離れなかっただろうし、サヤカは僕をそばにいさせてくれただろう。

僕たちは同じ大学へ行った。僕は経済学部、彼女は外国語学部だった。春が過ぎ、夏が過ぎ、僕たちは何事もなく楽しく過ごした。

だが、夏休みが終わると、彼女にはどこか陰ができていた。大学でできた友人と話をしている時にも、あの笑顔を見ることができなかったが、高校時代には見られなかった苦笑いと、空中を見ているような不自然な顔をよく見かけるようになった。そして、その年の十一月二十日、彼女は命を絶った。住んでいたマンションの八階から彼女は飛び降りた。固いコンクリートに叩きつけられた。遺書はなかったそう。僕は何か？　と思ったが、誰も自殺の理由を知らなかった。想像することさえできなかった。

僕はサヤカの葬式には行けなかった。彼女は身内だけでこっそりと灰にされた。

僕が笹島と知り合ったのは、今年の四月だった。僕と彼はドイツ語の講義をとっていた。といっても、彼はドイツ語が話せたし、その必要はなさそうだった。何故かと僕は聞いたことがある。彼は「簡単だからだよ」と言った。僕にとってドイツ語は簡単ではなかった。だが、僕はドイツ語をマスターしたかった。それはサヤカのために。サヤカは高校時代からドイツに興味を持っていた。いつかドイツに行つて、ヘッセが見た景色を見たいの、そう言っていた。

「なぜ？」と僕は聞いた。

「ヘッセは私を助けてくれたの」

「たとえばどんなふうに？」

「それは秘密」と彼女は言って笑った。僕はそうした彼女を見ると、心に春がきたみたいに嬉しくなった。

だが、その彼女を笹島は壊した。そして死に追いやった。彼はドイツ語を餌に彼女を引き寄せ、その他大勢の女と同じ扱いをしたのだ。英語とドイツ語は笹島の得意な誘い文句だった。

僕がそれを知ったのは彼の家でドイツ語を教えてもらっている時だった。笹島は「なんとなく思い出したんだけど」と言って、「三年前にもドイツ語をここで教えた子がいたんだよ。可愛い子だったけど、死んじゃったんだ」と続けた。

「その……子の名前は？」と僕は言った。心臓が強く脈を打ち始めていた。

「さあ、忘れちゃったよ。でも、中学の頃いじめられてたって言ってたな。俺のことを信用しすぎている感じがしてさ。まあ、初めてだったみたいだし、乙女なのは分かってたんだけど」

僕は考えた。だが、中学の頃いじめられていたという話を彼女から聞いたことはなかった。だから僕はきつと他の誰かだろうと思った。その時は。

「その子とはどうなったんだ？」と僕は聞いた。

「どうもこうも。俺はこういうやつだろ？ しつこくされるのが嫌いなんだ。それから一度も会ってないし、電話もメールも無視したよ。それでもくるから遊びだっって言ってやったんだ」

僕は呆れてものが言えなかった。こういう人間がいるのかと。酷いものだ。だが、僕には関係のない人間で、僕はこの人間からドイツ語だけを学べばいいと思っていた。だが、その日、僕が帰ろうとすると奴は言った。

「ああ、サヤカって名前だったな。同じ学校のやつだよ。知ってるか？」と笹島は簡単に言った。

その時の僕の顔はどんな顔だっただろうか？ 想像することもできない。僕はショックで何も言えず、黙って笹島のそこをあとにした。

それから僕はすぐに殺人計画を立てた。だが、どう考えても完全犯罪はできそうになかった。だが、サヤカが死んだ十一月二十日に

殺すことだけは決めていた。その日に絶対に殺してやると僕は強く思っていた。僕が偽のアリバイを作るための浅はかなトリックは、前日の十九日に思いついた。僕の部屋にサヤカが来た時に言った言葉があった。

「あのスーパーさ、防犯カメラがないんだね。店員さん同士が何か話してた」

僕はすぐに、そのスーパーに言って、天井や壁を見てまわった。確かに何もなかった。もしかしたら、いけるかもしれない。そう思って、計画を実行した。

十二月二十日、笹島は大学にいた。彼は講義を受け、そのまま家に帰るのが普通だった。その日も奴は普通の行動をした。僕は偶然を装い、接触した。ドイツ語を教えてほしいんだけど、と僕が言う。と彼は少し渋い表情をしたが、「八時くらいまでだったら暇だし、いいぜ」と言ってくれた。

その後、僕は彼の部屋に行き、ドイツ語の勉強をしたあと彼に聞いた。

「お前がドイツ語で釣ったサヤカって女の子は、たぶんお前のせいで自殺したんだよ。それをどう思う？」

「知らないよ」と笹島は捨てるように言って、鼻で笑った。

それを聞いた僕は、バッグから包丁を取り出し、笹島をベッドに押し倒して、胸を刺した。笹島は驚いた表情で「なんでだ？」と微かに言った。だが僕は何も言ってやらなかった。後悔も何もかもさせてやるものかと思った。笹島が動かなくなったあと、僕は数回胸を刺した。僕の憎しみは全く動かなかった。ずっと僕の中にある。今もだ。今も僕は笹島が憎い。何回も、何回でも殺してやりたい。

僕はそのあと、バッグに入っていた服と着替え、血のついた服と包丁をバッグに入れて、部屋を出た。発見を遅らせるために鍵を閉めることも考えた。だが、どこを探しても鍵は出てこなかった。だから、僕は諦めて、できるだけ早くそこから立ち去った。

そして、僕はスーパーに行き、レシートを取り、そのレシートに

書かれたものを違うスーパーに買いに行った。買った食材や、その袋とパックを燃えるゴミとして出した。血のついた服もそうだ。牛肉は半分冷凍した。包丁は洗って台所に置いておいた。買いに行く時間がないだろうと思ったからだ。

案の定、警察は僕のところに来た。夜中の一時だった。僕はそれから、あれこれ聞かれた。笹島のことや、アリバイのことも。

「あなたのやったことを私は知っています」とパンダ男は言った。

「だけど、あなたは色々なことを知らない。私は、それをあなたに伝え、そして、あなたを助けるためにここに来たんです」

「僕を助けるって？ 無理だよ。警察が来るんだろ？」

「私にはそれができます。刑務所は嫌でしょう。私は檻の中というのは嫌です」

「どうやって？」と僕は聞いた。

「まず、その前にサヤカさんの話をしましょう」。パンダ男は正座をしていた足を崩して、あぐらをかいた。ゴトっと固いものが何かにぶつかる音がした。

「サヤカさんは、中学の頃いじめられていました。三年生の半分は不登校だったそうです」

「信じられないな」と僕は言った。

「そうですね。高校でのサヤカさんはそんな暗い過去がなかったような明るい女の子でした。でも、いじめのことは事実です。そして、なぜあんなに明るくなれたのか。それは、ヘルマン・ヘッセのおかげなのです。彼女が大好きだった作家です。私はヘッセの作品をあまり読んだことありませんが、彼は孤独について書いていたようです。もちろん、それだけじゃないでしょう。ですが、彼女はその部分に惹かれたのです。彼女は中学時代の孤独な自分と、彼の描く主人公や、物語に自分を重ねたのでしょう。同情や慰みというものは励ましよりも心を救ってくれるものです。サヤカさんがあなたに秘密にしていたものは、それです。サヤカさんはあなたに明るい

部分だけを知ってもらいたかったのですよ」

僕は黙ってそれを聞いていた。サヤカの顔を思い出していた。

「その秘密の部分を、笹島さんに話した。なぜかといったら、私も分かりません。残念ながら、そこは話してくれませんでした。でも、私が考えるにサヤカさんは乙女で、男を見る目がなかったのです。純粹過ぎたのです。女の子としてはいいですが、女としては少し残念だと言ってもいいでしょう。いえ、これは私の考えです。本当のところは分かりません。とにかく、サヤカさんは笹島さんを信じ切っていた。だけど、裏切られた。そして、どうしようもなく死を選んだ」

「そうか……。そうなのかもしれないな……」と僕は言った。涙がぶわっと音を立てるように出てきた。

「あと、これは言わなくてもいいかもしれませんが、とりあえず。笹島さんはサヤカさんが死んだことを気にしていたと思います。なぜなら、笹島さんはサヤカさんが亡くなって以降、大学構内であまり派手な行動を起こしていません。でも、まあ、これは憶測です」

男は全てを言い終わったのか背筋を伸ばした。背筋を伸ばすパンダはどこか可愛かった。

「これが、私の知っていることです。何か質問は？」

「何もない……。いや、二つあったよ。あなたは、どうやってそれを知ったのか。そして、僕をどうやって救うつもりなのか」

「それは今から分かります」

そう男は言くと、右手を背中の中の後ろにまわした。そして、片膝を立て、立ち上がる姿勢をとった。そして、素早く体を捻った。

俺とサヤカ、そして誰かさん

【4】

俺は血のついたハンマーを、ベッドの上に置いてある布団で拭いた。そして、眼球や脳みそが飛びでている西の頭を隠すように布団を被せた。

「これは依頼なのだ、西くん。『彼を私のそばに』、彼女はそうだったのだ。この殺人の依頼者はサヤカだ。彼女は死んだあとも、ずっと笹島のまわりをうろちよろしていた。恋ではなく、恨みだ。笹島をどうにか殺そうとしていたらしいが、それはうまくいかなかった。だが、彼女の代わりに君が笹島を殺した。それをサヤカが見ていた。彼女は泣いたそうだ。君にこんな思いをさせてしまった私は愚かだったと。そして、君のことを案じた。君にこれ以上苦しい思いをさせたくない。そこで俺の出番だ。彼女は誰かにお願いをし、俺は誰かさんの斡旋を受けて、彼女と会った。そして依頼を受け、実行した。誰かさんが、サヤカにどんな見返りを求めるか知らないが、俺は誰かさんから見返りを受けることができる。そういうことだよ、西くん。君はもうサヤカ的笑顔を見れたかい？」

俺は洗面所に行き、服を全部脱いだ。鏡を見てみた。今回は渋い顔をした男だ。一昔前の映画俳優のようだ。

「なるほど」と俺は声を出した。何度聞いてもいい声だった。

前回はひどい不細工の姿で殺人をしなければならなかった。青森は穏やかでいいところだったが、退屈とも呼べた。

俺はシャワーを浴び、西の使っていたシャンプーを使って髪を洗った。疲れと穢れが洗い流されていくようだった。それにしても、なぜ対象者には俺がパンダの姿に見えるのだろうか。ややこしいヒントだ。対象者の写真を渡してくれたら簡単に見つけることができる

るのに。今回は『もぐらのあと』と書いてある紙一枚だけ渡された。シャワーを浴びると俺は、ハンマーを洗面台で洗い、血のついた服を着た。そして嫌なおいのする部屋に戻り、コートを着て、ボタンをしっかりとめた。こげ茶色のソフトハットをかぶるともう一度洗面所に行き、鏡の前に立った。

「男前だなー。今回は楽しめそうだ」

俺はそうバリトンボイスのいい声で言うと、誰かさんがくれた二回分の報酬、一週間という時間をこの世で楽しむため、勢いよく部屋を出た。

俺とサヤカ、そして誰かさん（後書き）

ミステリー小説を目指して書いてみたけど、どこか違うような気がする。

ですが、勉強になりました。また機会があれば書いてみたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7233q/>

殺し屋パンダ

2011年2月12日22時27分発行